

# ミンスクのホロコースト

—— ユダヤ人抵抗運動の成果と限界 —— (後篇)

野 村 真 理

## 目 次

- I はじめに
- II ベラルーシ人とユダヤ人
- III 独ソ戦開戦とゲットー抵抗運動の組織化
  - 1. ミンスク占領
  - 2. ゲットー抵抗運動の組織化

(以上、第39巻第1号掲載)

- IV ユダヤ人虐殺の進行
  - 1. 1941年11月アクション
  - 2. ドイツ・ユダヤ人ゲットー
  - 3. 1942年3月アクション
- V パルチザンとユダヤ人
- VI ミンスク・ゲットーの最後 —— おわりにかえて

## IV ユダヤ人虐殺の進行

### 1. 1941年11月アクション

ナチ・ドイツに対して抵抗運動を展開したポーランド国内軍(略称AK)や、リトアニア人戦線(略称LF)、西ウクライナを中心に活動したウクライナ蜂起軍(略称UPA)と比較するとき、ミンスクの市委員会の特徴は、その活動指針に反ユダヤ主義を持たなかったことである。ナチ・ドイツ占領下で、前者がポーランド人やリトアニア人あるいはウクライナ人の民族解放と同時に民族の浄化を唱え、ユダヤ人に対してあからさまに排斥的であったのに対し、後

者の目標はソ連の解放であり、解放からユダヤ人を排除する論理は存在しなかった。ゲットーからの逃走を第1目的とするユダヤ人の抵抗運動は、ゲットー外のロシア人やベラルーシ人の協力なくして成功はありえず、ゲットーの抵抗運動と市委員会の連携が成立したことの意味は大きい。

しかし、他方で、ユダヤ人に対し、ミンスクの一般住民の態度はどのようなものであったのか。第II章で述べたように、ロシアやウクライナでは、ナチの反ユダヤ・プロパガンダが、ソ連時代に抑え込まれたかに見えた民衆の反ユダヤ感情を再活性化させたともいわれる。これに対してミンスクは、ナチにとってプロパガンダの手応えが乏しい街であり、少なからぬユダヤ人が、知り合いあるいは見知らぬロシア人やベラルーシ人の助けで生き延びた。だが、こうして生き残った者たちの体験を一般化するのは危険であろう。

ベラルーシでナチは、過酷な食糧徴発政策を執行した。1934年にボブレイスクで生まれたメイエルソンが語るところによれば<sup>1)</sup>、学校の教室に掲げられたヒトラーの肖像画で、絵の下には「ヒトラー 解放者」と書かれていたが、いたずら者が「解放者」の前に「パンとベーコンからの」と書き加えた。当然ながら、これを発見した女性教師は顔面蒼白になったという。ミンスクもまた極度の食糧欠乏状態にあったが、それでも、ゲットーの鉄条網を潜り抜け、物乞いにくる子供に食べ物を与えた者もいれば、他方で、戦前親しく交際していたユダヤ人に対して、態度を豹変させる者もいた。ユダヤ人とかかわることは死の危険を伴うからである。また、一般住民とナチとのかかわりにしても、食糧徴発に加え、ドイツでの強制労働への連行や、パルチザン協力を疑われた村全体の焼き払いは人々の激しい反発を引き起こしたが、他方では、志願して、あるいはさまざまな成り行きでナチの協力者となる者たちもいた<sup>2)</sup>。彼らは「黒い犬」と呼ばれ、人々から忌み嫌われたが、彼らにとってナチ協力は、生活のための仕事だった。

圧倒的な武力差があるとき、地下抵抗運動のなしうることはわずかでしかない。ドロズディに始まる占領初期の大量殺害は、ユダヤ人をゲットーに囲い込んだ後、9月をはじめまで続行される。特別行動隊Bの出撃コマンド8と警察大隊により、3日間で2278人が殺害されるなど、大小規模のアクションが数回にわたって執行され、犠牲者の数は5000人にのぼるとも推定される<sup>3)</sup>。

そのさい少数の女性も含まれたものの、主たる殺害対象は15歳から60歳の男性であった。ゲッソーが存在した全期間を通じて、ゲッソーの監視にあたった保安警察隊員や、現地で雇われたその協力者による気まぐれな殺害は日常茶飯事であったが、初期の大量殺害は9月はじめでいったん終了する。ミンスクは9月1日に民政に移行した。特別行動隊Bはミンスクを出て東進し、ミンスクは、ラトヴィアと同じくフランツ・ヴァルター・シュタールエッカー指揮下の特別行動隊Aの管轄下に入った。比較的静穏な9月、10月がすぎた後、老若男女を問わぬ最初の無差別大規模アクションを引き起こしたのは、大ドイツ帝国領域のユダヤ人の東方移送という外的要因である。

1939年9月の第二次世界大戦開戦まで、大ドイツ帝国領域、すなわちドイツ本国、1938年にドイツに合邦されたオーストリア、ならびに翌1939年にドイツの保護領となったチェコでは、ユダヤ人に対し、財産の剥奪と国外移住という名の追放政策が進められる。しかし、戦争が始まると、移住は滞らざるをえなかった。もはやこの時期、進んでユダヤ人を受け入れる国がなかったことに加え、船の切符の入手も困難さを増したからである。1941年夏になってもなお、ドイツ本国には、ベルリンを中心に約16万7000人、オーストリアには、ウィーンを中心に約5万3000人のユダヤ人が残留していた。こうして国民に公言しながら果たされないままであった大ドイツ帝国領域のユダヤ人浄化の実現に対し、新たな道を拓いたのが、独ソ戦開戦当初のドイツ軍の快進撃である。1941年9月8日、ドイツ北部方面軍がレニングラードを包囲し、26日、南部方面軍がキエフを陥落させると、戦争の進展に自信を得たヒトラーは、大ドイツ帝国領域のユダヤ人の東方移送を了承する。この時点でのナチ中央部の計画は、年内のうちに大ドイツ帝国領域のユダヤ人6万人をヴァルテガウの都市ウッチのゲッソーに集め、年明け後、春を待って、さらに東方のソ連領内に追放するというものだった。しかし、収容能力の限界を超えた大量のユダヤ人の「押しつけ」に対し、現地ヴァルテガウのナチ指導者とウッチのゲッソーの管理者は激しく反発する。結局、ウッチでの受け入れは2万5000人で決着した。そして、ウッチに替わる移送地とされたのが、ラトヴィアのリーガとミンスクのゲッソーである。とはいえリーガもミンスクも、収容場所がないのはウッチと同様であり、食糧についてはわずかな余

裕すらなかった。そのため、この無理な移送は、両地で現地ユダヤ人の大量殺害を引き起こすことになった<sup>4)</sup>。

1941年12月末にゲットーを脱出し、パルチザン部隊に加わったハンナ・ルビンチクの1942年9月21日付けの報告<sup>5)</sup>、同じく1942年3月半ばにゲットーを脱出し、パルチザン部隊に加わったエンタ・マイズレスならびにフリーダ・グルヴィチの1942年10月29日付けの報告<sup>6)</sup>、スモラルの回想記、ドイツからミンスクに移送されたユダヤ人で、数少ない生き残りの1人であるハインツ・ローゼンベルクの回想記<sup>7)</sup>を合わせ読むと、ドイツ・ユダヤ人の移送に先行するアクションは、ロシア十月革命記念日にあたる11月7日に、ゲットーのおそらく2か所で執行された。2か所とは、ルビンチクらが証言するオストロフスカヤ通り(図7)と、ローゼンベルクのいう赤い建物と白い建物があったユダヤ墓地近くの一帯である。(本稿前篇の地図2参照。)

スモラルによれば、11月7日より2、3日前、彼らのもとに、ゲットーの一部地域のユダヤ人が掃討されるとの情報が入っていた<sup>8)</sup>。そのため抵抗組織



図7 旧オストロフスカヤ通り(現在はラコフスカヤ通り)の旧シナゴーク  
現在はチェスの練習場になっている。  
(2017年8月27日、筆者撮影)

の細胞を通じ、該地域のユダヤ人にはかの場所へ逃げるよう警告が発せられた。11月6日の夕方、ユダヤ評議会やゲットー警察のメンバー等、ゲットーの管理運営上、必要な者たちと、専門技術労働者700人が、その家族も含め、ゲットー外のシロカヤ通りで親衛隊が運営する労働作業所に隔離されると、いったい、これから何が起こるのか、ゲットーは恐怖に包まれた。

ルビンチクらの同時代証言にもとづけば、翌11月7日の朝7時、ドイツ人からなる保安警察部隊と、ミンスクの現地人協力者やリトアニア人、ソ連兵捕虜から寝返ったナチ協力者——ここで使われたのは主にウクライナ人——等で構成された補助警察隊が襲ったのは、ゲットーの南東境界をなすネミガ通りに交わるオストロフスカヤ通り一帯である。人々は家の外に駆り出され、フレブナヤ通りで待つトラックへと連行され、そこで赤旗を掲げてインターナショナルを歌うよう強制された。トラックまで移動できない者は、家のなかあるいは通りで射殺された。トラックとは別に、通りに駆り出された者たちの一部はゲットーに隣接するパン工場の中庭に集められ、トラックに乗せられた者たちがミンスク近郊の村トゥチンカへと連れ去られる一方、パン工場の者たちは2時間後に解放された。ユダヤ人を二つにわけた目的は、アクションで掃討する人数の調整であったとも考えられるが、残された史料からは不明である。スモラルによれば、トゥチンカはソ連の内務人民委員部第6部の倉庫があったところで<sup>9)</sup>、トラックで連行された者たちはいったん倉庫に詰め込まれた後、11月10日から11日にかけて、あらかじめ倉庫付近に掘られていた穴の淵で射殺された。そのさい弾が急所を外れ、命を取り留めたわずかなユダヤ人が夜陰に紛れて死体の山からはい出し、ゲットーにもどって出来事の一部始終を伝えたという。

アクションが終了した11月11日は、大ドイツ帝国領域を出発したユダヤ人の第1団がミンスク駅に到着した日にあたる。以下、ローゼンベルクの回想記によれば、彼ら約1000人がハンブルク駅を出発したのは11月9日の午前10時だった。列車は11日の夜ミンスクに到着したが、下車を許されたのは翌12日の朝5時である。駅からゲットーまで徒歩で移動したが、まったくミンスクの街を知らないローゼンベルクには、到着した場所について、中央に、もとは未完成の学校と思われる赤い建物と、おそらく、これももとは学校であつ

たと思われる白い建物があるところという以外、それがゲッターのどこなのか認識できなかったものと思われる。到着後、ただちに命じられたのは、彼らの住まいになるべき赤い建物の片づけだが、そこで彼らが目にしたのは「床を覆う数百の死体」だった。「いたるところに血があり、かまどやテーブルには、まだ食べ物が置かれたままだった。どの部屋も、完全にめちゃくちゃにされていた<sup>10)</sup>。」他殺体など見たこともない彼らの衝撃は大きかったが、とにかく死体を広い中庭に運び出し、建物内の汚れ物は窓から投げ捨て、焼却したという。

さらに翌13日、ローゼンベルクら一部の者たちは、ゲッターの「ロシア・ユダヤ人側」へと連行され、そこでも放置されたままの死体の片づけを命じられる。これが、彼らがゲッターで見た2度目のユダヤ人の死体の山であり、場所は、ルビンチクらの証言で言われる11月7日のアクションの現場と考えて間違いないだろう。そこで彼らが聞かされたのは、作業は、これから新たに到着するドイツ・ユダヤ人の収容場所作りのため、ということだった。実際、ハンブルクのユダヤ人の出発後、1日から3日おきの間隔で、デュッセルドルフ、フランクフルト、ベルリンから、それぞれ約1000人のユダヤ人がミンスクに向けて出発する。ミンスクで第2の大規模アクションが執行されたのは、11月14日にベルリンを出発したユダヤ人が18日に到着した後、11月20日のことである。

11月7日のアクションの記述が比較的詳細であるのに比べ、奇妙なことに11月20日のアクションについては、同時代証言でも、スモラルの回想記でも、わずかにしか語られず、特別行動隊の報告書では全く言及されていない。アクションが執行された場所は、11月7日の現場の東に位置するザムコヴァヤ通りやサニタルナヤ通り付近であり、駆り出された人々は、このたびは徒歩でトゥチンカに連行され、連行直後に穴の淵で射殺された。

11月7日のアクションの犠牲者数について、ルビンチクは1万人としているが、12月1日付けの特別行動隊Aの報告は、「ミンスクでは、特殊コマンド1bにより、11月7日から11日に合計6624人が射殺された<sup>11)</sup>」と述べるのみである。20日のアクションについては、ルビンチクは犠牲者を1万5000人としているが、おそらくこれは過大であり、ベラルーシのホロコーストの研究者ゲルラハの推定は5000人である<sup>12)</sup>。さらにゲルラハは、特別行動隊等の報告

が沈黙しているため従来の研究では見落とされてきたが、12月10日、11日の両日にも約2000人が射殺されたとする<sup>13)</sup>。

## 2. ドイツ・ユダヤ人ゲットー

11月20日のアクション後、ブリュンから約1000人、ハンブルクとプレーメンから合わせて約1000人が到着し、最後に、11月28日にウィーンを出発したユダヤ人約1000人が到着したのは、出発から8日後のことである。ウィーンのユダヤ人の多くは老人だった。この時期、大ドイツ帝国領域からミンスクに移送されたユダヤ人は約7000人である。

ナチは、彼ら「ドイツ・ユダヤ人」をもとからゲットーにいた「ロシア・ユダヤ人」と区別し、前者をゲットーの一角を鉄条網で囲んだゲットー内ゲットーに収容したが、それがどこに位置したのか、正確には特定されていない。ローゼンベルクからハンブルクのユダヤ人が到着した赤と白の建物があったところとは、ユダヤ墓地に近く、ゲットーのメインストリートであるレスプブリカ通りとそれに並行するオボヴナヤ通りに挟まれた一角で、そこが「特別ゲットー1」とされた。(図8)ローゼンベルクが住処としたのは、そのなかの13という番号がふられた小屋のような建物である<sup>14)</sup>。上述したように、ローゼンベルクの回想記は、特別ゲットー1とされる地区でもアクションが執行されたことを物語るが、ルビンチからの証言は、この地区には一切触れていない。

他方、ルビンチから証言するネミガ通り近くのゲットー南東部に設置されたのが、「特別ゲットー2」である。ハンブルクのユダヤ人に続いて到着したデュッセルドルフとフランクフルトからのユダヤ人は、特別ゲットー1に収容されたのに対し、ベルリン以後の者たちは、特別ゲットー2で、アクションにより空き家となった建物に収容された。(特別ゲットー1と2のおよその場所については、本稿前篇の地図2参照。)

ドイツ・ユダヤ人の状況は、現地のユダヤ人と比べ、いつそう悲惨だった。到着直後まで彼らは、自分たちは何といてもドイツの出身であり、ナチも、ロシアのユダヤ人とは別扱いをするはずだと信じていた。それが幻想であることはただちに判明したが、それでもなお彼らは、別の幻想にすがろうとした。ミンスクの保安警察の長であったクルト・ブルクハルトは、1942年1月



図8 旧レスブリカ通り(現在はロマノフスカヤ・スロボダ通り)に設置されたブ  
レーメンのユダヤ人のための記念プレート  
タイトル「未来のための記憶」は、イディッシュ語、ロシア語、ドイツ語の3語  
で記されている。本文は次の通りである。  
「1941年ソヴィエト連邦に対するファシスト・ドイツの襲撃。ミンスクの死の  
ラーゲリへブレーメンのユダヤ人の移送。われわれは犠牲者を記憶する。ブ  
レーメン1991年ミンスク。」  
(2017年8月27日、筆者撮影)

に作成された報告書で次のように書く。

「ミンスクに到着した帝国ドイツ・ユダヤ人は、自分たちは東部開拓者だと思  
い込み、植民地開発の任務のために当地に送られたのだと信じていた。と  
ころがミンスク・ゲットーに入れられ、そこで、もう、かなりの期間ひどい

状況下での生活を強いられるにおよび、彼らのあいだで、今度は別の見方が広がった。つまり、移住は一時的な措置で、戦争終結後は、またドイツに帰ることが許されるというのだ。多くの者はこの考えにすがりつき、目下の苦難を少しでも軽く耐え忍ぼうとしている。ごく少数の者ははっきり先のことを見通しているが、それを口には出さない<sup>15)</sup>。」

スモラルによれば、ドイツ・ユダヤ人は、ゲットーの内外に抵抗運動が存在することを知っても、それは「東欧ユダヤ人」のやることで、自分たちがやることではないという態度であった<sup>16)</sup>。ドイツ・ユダヤ人が「東欧ユダヤ人」というとき、そこにはしばしば、文明に遅れた東欧の無知蒙昧なユダヤ人という見下しが込められていた。しかし、いずれにせよ、現地語をまったく理解せず、現地の地理も知らない彼らがゲットーから逃走しても、生き延びられる可能性はほとんどなかったであろう。彼らは、ドイツ・ユダヤ人とロシア・ユダヤ人を隔てる鉄条網越しに、なけなしの所持品をロシア・ユダヤ人がゲットー外から持ち込んだ食物と交換したが、所持品が底をつく、飢えと寒さで急速に衰弱した。1941年に到着した約7000人のうち、戦後まで生き延びた者は50人に満たないという<sup>17)</sup>。

### 3. 1942年3月アクション

ドイツ軍によるモスクワ攻略が失敗し、東部戦線が膠着した1941年末、大ドイツ帝国領域ならびに東方の占領地に抱える膨大な数のユダヤ人に関して、彼らをソ連領内に追放するという、独ソ戦での勝利を前提としたシナリオは当面不可能であった。「ヨーロッパにおけるユダヤ人問題の全体的解決」のための会議、すなわち後にヴァンゼー会議と呼ばれることになる会議は、本来1941年12月9日に開催される予定であった。会議は、日米開戦とドイツの対米宣戦布告のため、年明けの1月20日に延期されたが、おそらく当初の開催予定の12月までに、ナチのユダヤ人政策は絶滅政策へと大きく転換する。ナチ・ドイツが独ソ戦へと踏み切った理由は、対英戦を勝ち抜くための食糧と資源の確保にあった。そのさい、すでに開戦前の作戦段階で、ドイツ本国への食糧供給と、侵攻地で展開するドイツ軍への供給のため、占領地で苛酷な食糧徴発政策を執行すれば、現地住民の数百万が餓死する事態も起こりうる

と想定されていた。電撃戦による短期決戦の失敗で、餓死の可能性は現実のものとなりつつあり、この絶対的な食糧不足が、ナチのいう劣等人種の最下位に位置するユダヤ人を直撃し、いわば「口減らし」のための絶滅政策を促したともいわれる。

1942年春から夏にかけて、ベウジェツ、ソビブル、トレブリンカの絶滅収容所がフル稼働を開始した。このユダヤ人絶滅政策において、総督府のゲットーのユダヤ人の多くが絶滅収容所へと移送されたのに対し、独ソ戦による新占領地では、絶滅収容所への大規模移送は行われず、殺害はほとんど現地で執行された。ミンスクも例外ではない。アクションは、凍土が緩み、ユダヤ人を埋める穴を掘ることが可能な3月になって開始された。

それに先立ち、先に引用した1942年1月のブルクハルトの報告<sup>18)</sup>は興味深い。報告によれば、この時点でミンスクにいるユダヤ人は、ロシア・ユダヤ人が約1万8000人、ドイツ・ユダヤ人が約7000人であったが、彼ら「ユダヤ人問題の最終解決」に関して、軍部とヴィルヘルム・クーベを長とするベラルーシ全権区の民政府のあいだには、意見の相違が存在した。すなわち民政府によれば、専門技術労働者の割合が高いユダヤ人労働者は、東方地域の経済再建にとって欠かすことのできない存在だった。彼らをベラルーシ人の労働者で置き換えることが可能になるまで、おそらく数年が必要であり、またユダヤ人は、きわめて安価な労働力であることも考慮されるべきであった。民政府は、こうした「経済的必要」に照らせば、ユダヤ人問題の早急な解決は適切ではないとする。これに対して、軍部にとってユダヤ人は「ポリシェヴィキ思想の最も確実な担い手」であり、ユダヤ人こそ、情報や衣類等の提供によって、ロシア人の抵抗運動やパルチザンの活動を強化している張本人であった。ユダヤ人労働力は捕虜によって代替可能であり、したがって治安全般を考えれば、ユダヤ人問題の最終的にして根本的な解決は不可欠と考えられた。

とはいえ、ブルクハルトによれば、上記の民政府の見解もさることながら、現在の厳しい食糧事情のもとでは、ユダヤ人の労働力を維持することはきわめて困難だった。ミンスクでは「労働力全般が衰弱しているが、極度に栄養が欠乏したユダヤ人は疫病に感染しやすく、[疫病の]危険の発生源<sup>19)</sup>」になっていた。これに関連して『計算された殺害』の著者ゲルラハは、民政府の見解を

疑問視し、戦闘で都市や産業基盤が破壊された東ベラルーシでは、大量の労働力は不要であったはずだとする。そして、先の11月のドイツ・ユダヤ人の受け入れに伴うミンスクのユダヤ人の殺害にしても、収容場所の確保に加え、迫りくる冬を乗り切るための食糧対策の側面が無視できないとする<sup>20)</sup>。

民政府あるいは軍部のいかなる計算のもとであるにせよ、1942年のユダヤ人絶滅政策の始動後、ミンスクで最初となる3月アクションで殺害を予定されたのは5000人だった。民政府の「経済的必要」に照らせば、労働不能のユダヤ人から優先的に排除されなければならないはずだが、専門技術労働者の数が少なく、ロシア・ユダヤ人より体力的衰弱も激しいドイツ・ユダヤ人はこの5000人から除外された。クーベがドイツ・ユダヤ人に対して、射殺とは別のやり方での殺害を望んだためという<sup>21)</sup>。

アクションは、ユダヤ教のプーリム祭の日にあたる3月2日に開始された。指揮を執ったのは、ミンスクの保安警察ならびに情報部の司令官エドゥアルト・ストラウフの代行ヴァルター・ホフマンである。1942年の年明けからゲットー内の抵抗運動に対する捜査が頻繁化し、2月にユダヤ評議会の長ムシュキンや、抵抗運動の協力者であった評議会メンバーが逮捕される。ムシュキンの後継に任命されたのはモイセイ・ヨフェであった。3月1日、彼は、保安警察ならびに情報部司令部より、翌2日の午前10時までに5000人のユダヤ人を選び出し、ユブレイナヤ広場に集めるよう命令を受ける。ただし、5000人には、ゲットーの外で働かされる専門技術労働者が含まれてはならないとされた。5000人を集める目的は労働のためと説明されたが、そこに労働には不相当と思われる老人や子供が含まれてもかまわないとされ、説明は文字通りには信用できなかった。ヨフェは命令を無視する。危険を察知したスモラルらが流した指示は、3月2日の朝、ゲットー外の労働に動員される者はそこへ行くこと、ゲットー外の友人にかくまってもらえる可能性のある者は、3月1日の夕方、そこへ行くこと、それ以外の者はゲットー内で隠れ場に身をひそめることだった。ゲットーの粗末な住居の床下や屋根裏、かまどの奥の隙間等に作られた隠れ場は、ユダヤ人のあいだで「メリナ」あるいは「マリナ」と呼ばれた<sup>22)</sup>。

アクションはどのように進行したのか。これについて、アクションから間もなく3月12日にゲットーを脱出したマイズレス、グルヴィチらの同時代証

言と、スモラルの回想記には、かなりの食い違いがある。まずスモラルによれば、アクション執行者であるドイツ人がベラルーシ人やリトアニア人の協力者を従え、ゲットーに入ったのは、3月2日の10時であった。彼らは指示した5000人が用意されていないことを知ると、住居内に入り込み、その場にいた者を射殺し、隠れ場と思しきところに手当たり次第に手榴弾を投げ込んだ。このアクションで犠牲になったのが、ゲットー内に開設されていた孤児院の子供たちと、彼らの世話をしていた女性たちである。彼らはラトムスカヤ通りの先の、ベラルーシ語でヤマと呼ばれる窪地で前日のうちに掘られた穴の淵に連行され、そこで殺害された。子供たちを穴に投げ込むように命じたのはクーベであり、彼は穴の淵を回りながら、泣き叫ぶ子供たちに飴玉をまいたという。スモラルは、このときクーベの傍らにいたのがアイヒマンであったとする<sup>23)</sup>。

一方、マイズレスらによれば、アクションの開始は11時であった。さらに子供たちの殺害について、孤児院から連れ出された300人の子供とその世話人たちは、焼け落ちた壁紙工場の廃墟に集められ、そこで殺害されたとする<sup>24)</sup>。この日、ドイツ人ゲットーの住人は住居から出ることを禁じられていたが、ドイツ人ゲットーにいたベルトルト・ルドナーもまた、同日の日記に、焼けた壁紙工場の跡地に多くのユダヤ人が集められ、そこで撃たれたという話を伝え聞いたと記している<sup>25)</sup>。再びマイズレスらによれば、「ゲットーの通りには多数の死体が横たわっていた。次いでユダヤ警察の者たちは、死体を集め、ゴミの山のところへ運ぶように命じられた。そこで彼らは手に銃を握らされ、写真を撮られた。まるでユダヤ人自身がこうした殺害をやったかのように見せるためだ。そこには子供たちもおり、ドイツ人は子供たちに飴玉を投げ与えた。この『演出』も写真に撮られた<sup>26)</sup>。」

また、1935年にミンスクで生まれたマイヤ・クラピナは、2000年6月9日のインタビューで次のように述べている。「いく人かは『ヤマ』、つまり穴のところで死んだ。[しかし、]実際のところ、人々は穴のところで射殺されたのではなく、そこには死体が運び込まれただけだ。死体は穴に投げ込まれ、土をかけて埋められた。時には傷を負っただけの者が意識を取り戻し、穴からはい出してくるということもあった<sup>27)</sup>。」おそらくクラピナの記憶には、大人になってから聞き知った情報が入り込んでいると思われるが、マイズレスとルドナーの証言

を合わせ読めば、ヤマは、スモラルが語るような虐殺の現場というより、3月2日のアクションの犠牲者の埋葬場であったと考えられる。(図9)(図10)



図9 ヤマのホロコースト記念碑

まだホロコーストの記憶が生々しい1946年に、ユダヤ人たちの寄付で記念碑が建てられた。碑には、上段にロシア語、下段にイディッシュ語で次のように書かれている。

「人類の最も獷猛な敵ども、ファシスト・ドイツ人殺人者の手によって殺害された5000人のユダヤ人犠牲者の光ある永遠の記憶のために 1942年3月2日」  
碑文は、イディッシュ語詩人ハイム・マルキンスキによる。マルキンスキは、スターリンによるイディッシュ語作家弾圧後、イスラエルに移住した。

(2017年8月27日、筆者撮影)



図10 ヤマのホロコースト記念碑  
群像は2000年7月に設置された。  
(2017年8月27日、筆者撮影)

ゲッターに乗り込んだ保安警察隊は、結局、夕方までに目標の5000人のユダヤ人を殺害するにはいたらなかった。そのためモラルによれば、夕方、ゲッターの外の労働からもどった者たちの一部も射殺の対象となった。アクションは翌日も継続され、一部は徒歩でトゥチンカに、一部は鉄道でミンスク南西のコイダノヴォの森に連行され、そこに掘られた穴の淵で射殺された<sup>28)</sup>。同じくルドナーの日記によれば、アクションが終了した3月3日の夕べ、親衛隊員たちは派手な宴会をはったという<sup>29)</sup>。保安警察の報告によれば、このアクションの犠牲者は3412人であった<sup>30)</sup>。

## V パルチザンとユダヤ人

独ソ戦中、ベラルーシは、最も苛烈な対独パルチザン戦が展開された地域である。これは、ベラルーシの地理に負うところも大きい。都市や町の間近かにまで迫る森と、無数に点在する湖沼は、パルチザンにとって恰好の隠れ

場にして出陣基地ともなり、山が存在しない平坦な地形は彼らの移動を容易にした。スモラルらがゲッターのユダヤ人の逃げ場を求めたのも、発見、密告される可能性の高いミンスク市内ではなく、森のパルチザン部隊のキャンプである。そして、それが一定程度の成功を取めたことこそ、ゲッター内での武装蜂起をめざしたワルシャワやヴィリニウス、ビャウイストク等とは異なるミンスク・ゲッターの抵抗運動の特徴といえるだろう。

しかしながらユダヤ人とパルチザンの連携には、幾重もの困難があった。そもそもパルチザン部隊の目的は、前線に物資や兵士を運ぶ鉄道や自動車車両の爆破、軍需工場の破壊、通信網の切断など、ドイツ軍に対する妨害や、可能な場合には戦闘行為であり、ゲッターのユダヤ人の救出ではないからだ。女、子供、老人など、戦闘能力を持たないユダヤ人の受け入れは、部隊の足手まといになるだけだった。さらに、1939年1月で人口がせいぜい約24万のミンスクでは、ユダヤ人と抵抗運動にかかわる非ユダヤ人は、党やコムソモールで見知った同志である場合も少なくなく、その仲間意識がユダヤ人に手を差し伸べることに繋がった。しかし、森で活動するパルチザンのほとんどは、ミンスクと関係のない者たちである。さまざまな背景を持つパルチザンのなかには、ユダヤ人に対して露骨な偏見、反感、敵意を抱く者もいた<sup>1)</sup>。パルチザン部隊のなかで、ユダヤ人戦闘員と非ユダヤ人戦闘員のあいだに深刻な軋轢が生じ、ユダヤ人が独立の部隊編成へと分裂した例も少なからず知られている。こうした状況のもとで、とりわけ戦闘員になれないユダヤ人を救出するためには、そうした者たちの受け入れを使命とする特殊なユダヤ人パルチザン部隊が編成される必要があった。

ミンスクのユダヤ人とパルチザンとのかかわりの全貌を明らかにすることは本稿の能力を超えており、ここでは、「ユダヤ家族部隊106」、通称「ゾーリン部隊」の創設にいたる経緯に限定して両者の関係を見ることにする。

独ソ戦開戦後、早くも1941年7月3日のラジオ放送でスターリンは、ドイツ占領地でのパルチザン部隊編成を呼びかけ、呼びかけはピラで撒かれもした。しかし、最初に森に潜んだのは、撤退するソ連軍本隊に取り残された残兵や、ソ連兵捕虜収容所からの脱走者である。彼らは目的意識を持って戦う集団であるより、毎日を生き延びることに必死の集団であり、村を襲って食

物を強奪し、抵抗すれば殺害もためらわず、村人にとっては強盗集団と変りなかった。そのなかで、ミンスク南方のルデンスクの森に拠点を置いた元ソ連軍将校アレクサンドル・セルゲーエフ、偽名ピストロフが率いる一隊は、最も早い時期に戦闘集団の規律をそなえたパルチザン部隊のひとつである。第III章で述べた市委委員会のリーダー、スラヴェクのもとにピストロフらの情報をもたらされたのは、ミンスク・ゲッターの内外を結ぶ抵抗運動のネットワークが構築された時期にあたる。そのさい、当然ながらユダヤ人が抱いた関心は、ピストロフの部隊がゲッターのユダヤ人を受け入れるかどうかであった。そして、スラヴェクが放った密使を介して得られたピストロフの回答は、武器を持参する者は受け入れてもよいというものだった。これによって1941年末までに出発したのが、それぞれボリス・ハイモヴィチとネハマ・ルディツェルに率いられた2グループであったという。2人は、いずれもゲッターの抵抗運動のメンバーであった。ピストロフは、ハイモヴィチに対し、彼を指揮官とする小隊の編成を命じ、小隊は後述する「スターリン大隊」へと成長した<sup>2)</sup>。前章で述べた11月アクションの証言者であるルピンチクは、1941年12月24日にラジオ工場のトラックに隠れてゲッターを出発し、ピストロフの部隊に受け入れられた女性たちの1人だが<sup>3)</sup>、彼女らと上記の2グループとの関係は、残された証言からは不明である。また、戦闘員としては劣ると思われる女性たちがなぜ受け入れられたのか、これも残された証言からはわからない。彼女らのトラックがゲッターを離れた後、途中で乗り込んだ、おそらく非ユダヤ人と思われる者たちを含め、森へ向かったのは19人だった。しかし、数か月後、ピストロフの部隊がモギリョフへと移動したため、部隊とミンスクとの関係は切れた。

いずれにせよ、1941年末にゲッターを出発し、パルチザン部隊に受け入れられたこれらユダヤ人は、最初期の成功例であると同時に、例外的な成功例だった。というのも、この時期、スモラルらのゲッターの抵抗運動と森のパルチザン部隊のあいだで、ユダヤ人の受け入れに関し、直接交渉が成立するには至っていなかったからだ。ピストロフの部隊との接触を皮切りに、ミンスクには周辺で展開するパルチザン部隊の情報が徐々に入り始めるが、それら情報を握ったのは市委委員会である。また、誰を森に送り込むかの選別にお

いて決定権を握ったのは、元ソ連軍の将校を中心に結成された軍人たちの抵抗グループだった。軍人グループが、パルチザン部隊の戦闘能力強化という目的に照らして優先的に送ろうとしたのは、シロカヤ通りの労働作業所や捕虜収容所にいる元ソ連軍の兵士たちであり、軍事訓練の経験もないようなユダヤ人ではない。さらに、ユダヤ人は、森への移動の途上で発見されたとき、偽造された身分証明書を携行していたとしても、言葉のイディッシュ語訛りやユダヤの容貌で身元が割れる可能性が高いというのも、軍人グループがユダヤ人を拒否する理由とされた<sup>4)</sup>。パルチザン部隊とのあいだで森に送る者についての合意がなりたてば、森への道先案内人の配置、移動手段の確保等を受け持ったのは市委員会であり、ユダヤ人がこうした合意や道先案内なく自力で出発を執行しても、部隊の信用を得られず、森をさまよひ、野垂れ死にする可能性が高かった。

ところが、軍人グループのリーダーたちの一網打尽の逮捕と、それに続く市委員会の崩壊は、ユダヤ人とパルチザンの関係に転機をもたらすことになる。1942年3月25日、会議中であった軍人グループのリーダーたちが、そこに踏み込んだゲスターポによって拘束された。さらにメンバーの一部が口を割ったことにより、市内の抵抗運動のネットワークが次々に暴かれ、捕らえられた者たちのうち、251人が処刑、126人以上が獄中の身となる。このとき、軍人グループとの関係が薄かったゲッターの抵抗運動の方は最小の犠牲者を出すにとどまったが、市委員会はこれによってほとんど崩壊した。森へ送る者たちの選別をめぐる軍人グループとの対立、前章で述べた3月2日、3日のアクションの衝撃、そして、何よりも、これまでパルチザン部隊への仲介者であった軍人グループならびに市委員会の崩壊<sup>5)</sup>という一連の出来事は、ゲッターの抵抗運動のメンバーに、森のパルチザン部隊と自力で、直接、接触することの必要性を痛感させる。さらに、パルチザン部隊へのユダヤ人の受け入れを促すには、一定数のユダヤ人戦闘員を含むパルチザン部隊が存在して、彼らが存在感を発揮し、ユダヤ人の受け入れに関して発言権を持つようにならなければならなかった。

このような考えのもと、ゲッターの抵抗運動とパルチザン部隊との連携構築の使命をおび、4月10日にイスラエル・ラビドゥスが約20人を率いてゲッ

トーを出発、次いで同月25日には、ナフム・フェルドマンに率いられた25人が出発した。ラビドゥスが向かったのは、ミンスク南方のスルツクであり、彼らはそこで独自の小隊を編成した後、既存のベラルーシ人の部隊に合流した。他方、フェルドマンが向かったのが、ミンスクの西方わずか20～30キロのところに位置するスタロエ・セロ村近郊の森、スタロセルスキである。ここで彼らはベラルーシ人の部隊と合流し、一部隊を編成したものの、部隊長となりうる適任者がいなかった。そこでフェルドマンが、パルチザンとゲッターの連絡役を務めていた女性ターニャ・リフシツと、シロカヤ通りの労働作業所で働いていた抵抗運動のメンバーで、同じく女性のソーニャ・クルランドスカヤを介して行きついたのが、同じ作業所で働かされていた捕虜で、元ソ連軍中尉のセミョーン・ガンゼンコである。作業所に潜む抵抗運動のメンバーは、ガンゼンコのほか、同じ作業所にいた数名の捕虜を生ごみが詰まった樽に隠し、トラックで作業所の外に運び出し、連絡役のリフシツに引き渡すことに成功した。1942年5月のことである。このガンゼンコが率いる「ブジョンヌイ部隊」の成立こそ、「ゾーリン部隊」の成立に繋がることになる<sup>6)</sup>。

以下、ともに「ゾーリン部隊」に所属したハイム・フェイゲルマンとアナートル・ヴェルトヘイムによる1944年8月2日付けの同時代証言に従えば、「ゾーリン部隊」は、1943年はじめ、「スターリン大隊」の隊長ラファイル・ヴァシレヴィチとガンゼンコが、ゲッターの戦闘能力を持たないユダヤ人の救出と受け入れを使命とする特殊部隊創設の必要に同意し、「ブジョンヌイ部隊」に所属していたセメン・ゾーリンにその創設をゆだねたことに始まる。そのさいガンゼンコは、ゾーリンに18人の武装戦闘員を与えたという。彼らはミンスク・ゲッターから小グループにわけてユダヤ人を連れ出し、こうして1943年4月末に形を整えたのが「ゾーリン部隊」であった。彼らのキャンプ地は、スタロエ・セロよりさらに西方100キロに広がるナリボキの森の奥深くである。フェイゲルマンらの証言によれば、1943年7月、その構成は、戦闘員45人、非戦闘員270人であった。「ゾーリン部隊」は、ドイツ軍によるパルチザン殲滅作戦によって犠牲者を出しながらも、独ソ戦を生き延び、1944年7月9日に赤軍の先遣部隊との合流をはたす。そのときの構成員は、戦闘員137人、非戦闘員421人に膨らんでいた<sup>7)</sup>。

ちなみに、多数の非戦闘員を抱えるユダヤ人の独立のバルチザン部隊として最もよく知られているのは、ジェルスキ兄弟に率いられた部隊であろう<sup>8)</sup>。彼らは、第二次世界大戦開戦までポーランド領であったノヴォグルドク近郊の村の出身であり、ノヴォグルドクのゲッターを脱出後、彼らがキャンプを張ったのも、ノヴォグルドクから見て北西に広がるナリボキの森であった。ジェルスキ部隊もまた独ソ戦を生き延びたが<sup>9)</sup>、同じ森で「ゾーリン部隊」とのあいだにコンタクトがあったという。

スモラルが仲間4人とともにミンスクを出たのは、おそらく1942年9月25日の市委委員会の再崩壊直後のことであったと思われる<sup>9)</sup>。彼らは、予定されていた道先案内人を得られず、運を天に任せてナリボキの森の方向へと向かったが、スタロエ・セロ南西のヴェルトニキ村の近くで「フルンゼ部隊」<sup>10)</sup>に遭遇した。こうして1942年春に始まり、夏から加速されたゲッター脱出は、1943年10月のゲッター閉鎖にいたるまで継続された<sup>11)</sup>。ゲッターのユダヤ人のバルチザン部隊への受け入れ、さらにはミンスクのユダヤ人を主体とするバルチザン部隊の編成<sup>12)</sup>、1943年はじめに始まるゾーリン部隊の創設は、ベラルーシにおけるバルチザン戦に多少の余裕が出てきたことと深く関係する。

ソ連では、1942年5月30日に、ソ連軍最高司令部に附属するバルチザン部隊中央司令部が設置され、その最高司令官となったのが、1938年よりベラルーシ共産党第1書記の地位にあったポノマレンコである。ベラルーシでは、ミンスク南方約100キロに位置するリュバニの森にベラルーシで展開するバルチザン部隊を統括する司令本部がおかれ、各地域には地域本部が設置された。これにより、それまで孤立して活動していたバルチザン部隊のあいだに連携関係が構築される。また、はじめ武器も弾薬も欠乏していたバルチザン部隊では、武器を携行した戦闘員のみ受け入れ可能であり、そのようなバルチザン部隊を支えるため、ミンスクの抵抗運動のメンバーは、ドイツの軍需工場やさまざまな作業所から武器、弾薬、防寒具などの生活必需品を盗み出し、森へと送った。しかし、1942年春以降になると、バルチザン部隊に対してソ連軍から武器、弾薬が供給されるようになり、また陸路やパラシュートで有能な指揮官や戦闘員も送り込まれるようになる。これによってバルチザン部隊の活動は、より統制のとれた効果的なものとなり、活動の範囲も飛躍的に拡大

した。ドイツ軍によって繰り返されたパルチザン掃討作戦にもかかわらず、1943年夏をすぎるところ、ベラルーシの森はパルチザンの支配下にあった。

## VI ミンスク・ゲットーの最後 —— おわりにかえて

繰り返し言えば、ミンスク・ゲットーの抵抗運動の特徴は、森のパルチザン部隊との連携により、一定程度のユダヤ人のゲットー脱出に成功したことに求められる。しかし、この「一定程度」とはどれほどか。これについてスモラルら抵抗運動のメンバーは、1万人以上のユダヤ人がパルチザン部隊に受け入れられ、そのうち5400人が戦後ミンスクに生還し、ほかの者は戦争中に死亡したとする。またスモラルによれば、ゲットーの抵抗運動が組織したグループで脱出した者はせいぜい2000人であり、約8000人は、1943年の春から夏に、抵抗運動の支援なしに自力で脱出し、パルチザン部隊に受け入れられたという<sup>1)</sup>。

しかしながら、1942年はじめのロシア・ユダヤ人ゲットーの収容者数は1万8000人程度であること、この時点で約7000人であったとされるドイツ・ユダヤ人のうち、森に向かった者は皆無に近いこと、ユダヤ人のゲットー脱出が本格化するの、ようやく1942年3月2日、3日のアクション後であり、しかも、7月末には以下に述べるアクションによってゲットー収容者の数がさらに激減したことを考えれば、1万人もの多数の脱出成功はありえない話ではないかと思われる。レントロプによれば、現在のベラルーシの研究は3000人という数字をひとつの出発点としているという<sup>2)</sup>。

さて1942年7月末、ワルシャワ・ゲットー解体のため、ユダヤ人のトレブリンカ絶滅収容所への大規模移送が開始されたのと同時期、ミンスク・ゲットーもまた解体過程に入った。ベラルーシ全権区の長クーベは、オストランド帝国全権区の長ハインリヒ・ローゼに宛てた1942年7月31日付けの報告書において、もとポーランド領の西ベラルーシにおいても、もとソ連領の東ベラルーシにおいても、パルチザンの活動を支えているのはユダヤ人であるとの認識を示し、それゆえ「政治的観点」からすれば、「私にとっても、親衛隊保安部にとっても、当然ながら最も望ましいのはベラルーシ全権区からユダヤ

人が一掃されることである<sup>3)</sup>とする。しかしながら、クーベによれば、ここで配慮せざるを得ないのがドイツ軍の「経済的要請」であった。というのも、ミンスクは、東部戦線直近で軍需品を生産する工場や作業所の集中地であり、またそれらを前線へと運ぶ鉄道網の拠点でもあったからだ。独ソ戦が続く限り軍需品の生産は必要であり、生産を担うユダヤ人労働者、なかでも専門技術を持つ者たちを失うことは避けねばならなかった。

クーベが述べる通りであれば、彼の「政治的観点」と軍の「経済的要請」の双方を勘案しつつ執行されたのが、1942年7月28日に始まるアクションということになる。28日の早朝、いつものようにゲットー外の工場や作業場で働く労働大隊が出発した後、前回までのアクションとは異なり、ゲットー全体が保安警察隊によって包囲される。アクションは、従来の保安警察隊や補助警察隊に加え、中隊規模の軍も投入されるという大規模なものであったが、スモラルによれば、ユダヤ人の側では事前にアクションの執行を察知することができず、したがって事前に警告を発することもできなかった<sup>4)</sup>。ユダヤ人は、マリナに身を潜める間もなく襲われることになる。

まずアクションの対象となったのはロシア・ユダヤ人ゲットーである。住まいから駆り出された者たちは、トラックでミンスク南東約11キロに位置するマーリィ・トロスティネツ村近くのブラゴフシュチナの森に連行され、そこに掘られていた穴の淵で射殺された。そのほとんどは、労働不能の老人、女性、子供だった<sup>5)</sup>。翌29日にアクションの対象となったのは、ベルリン、ブリュン、プレーメン、ウィーンから移送されたユダヤ人が収容されていた特別ゲットー2である。彼らに対して使われたのは、少なくとも4台の黒いバス型のガス殺車である。走行中、密閉された車内に引き込まれた排気ガスによって、ブラゴフシュチナの森に到着するまでに車内のほとんどの者が死亡しており、まだ息のある者もそのまま穴に埋められた<sup>6)</sup>。(図11) (図12)

このときユダヤ人の殺害に加わった武装親衛隊員の1942年8月3日付けの活動報告書には、次のように記されている。「7月25日から27日に新しい穴が掘られた。7月28日、ミンスクのロシア・ユダヤ人ゲットーで大規模アクションが執行され、6000人が穴へと連行された。7月29日、3000人のドイツ・ユダヤ人が穴へと連行された<sup>7)</sup>。」一方、クーベの報告によれば、7月28日、29日



図11 マーリイ・トロスティネツのホロコースト記念碑  
(2017年8月27日, 筆者撮影)



図12 ブラゴフシュチナの森のホロコースト記念碑  
(2017年8月27日, 筆者撮影)

の両日に殺害されたユダヤ人は約1万人であり、そのうち6500人がロシア・ユダヤ人、残りがドイツ・ユダヤ人であった<sup>8)</sup>。しかし、アクションは2日で終了したわけではない。続く1日ないし2日をかけてゲットー内で隠れているユダヤ人の捜索が行われ、さらに推定1000人がミンスク北方に位置する農場ペトラシュケヴィチ近くに掘られた穴に連行され、そこで射殺された<sup>9)</sup>。

他方、28日のアクションの日の早朝にゲットーを出発したユダヤ人については、それぞれが向かった工場や作業場の長に対し、数日間ユダヤ人をゲットーにもどさないよう指示が出ていた。第IV章で述べたように、ハンブルクから来て特別ゲットー1に収容されていたローゼンベルクは、このときドイツ兵の兵舎で働いていたが、そこで現地のロシア人やベラルーシ人の労働者や、またドイツ人兵士からもゲットーの異変について知らされる。ゲットーにもどることを許されたのは、彼の記憶ではそれから3日目の夜だった。帰り着いたゲットーは静まり返っていたという<sup>10)</sup>。このアクションでは、ローゼンベルクがいた特別ゲットー1は対象とされず、特別ゲットー2で生き残ったユダヤ人は特別ゲットー1に移され、特別ゲットー2は閉鎖された。クーベの報告によれば、アクション後にゲットーに残るユダヤ人は、ロシア・ユダヤ人が6000人、ドイツ・ユダヤ人が2600人、計8600人である<sup>11)</sup>。

1942年明けから本格化するナチのユダヤ人絶滅政策の執行において、ブラゴフシュチナの森は、ミンスクのユダヤ人の殺害に先立ち、すでに大ドイツ帝国領域からミンスクに移送されたユダヤ人の殺害場所として使われていた。ドイツ・ユダヤ人がミンスク・ゲットーに収容されたのは、1941年11月の移送のみである。翌年5月に再開された移送でミンスクの貨物駅に到着したユダヤ人は、トラックまたはガス殺車で直接ブラゴフシュチナの森に連行され、あらかじめ掘られた穴の淵で射殺されるか、連行途上に車のなかでガス殺された。移送再開後、最初に到着したのは、5月6日にウィーンを出発し、11日にミンスク駅に到着したウィーンのユダヤ人約1000人である。同年10月9日に最後に到着したのも、同じくウィーンのユダヤ人約550人であった。その間、大ドイツ帝国領域からの移送は14回に上り、移送者は、最後の回を除き、毎回ほぼ1000人であった。ブラゴフシュチナの森での犠牲者は、約8550人のウィーンのユダヤ人が最多であり<sup>12)</sup>、テレージエンシュタットから移送され

た約5000人がそれに次ぐ。主たる虐殺執行者は、ミンスクの保安警察ならびに情報部配下の武装親衛隊と保安警察隊の隊員だった。

7月末のアクション後、ブラゴフシュチナでは大ドイツ帝国領域から移送されたユダヤ人の殺害が継続される一方、ゲットーでは大規模アクションは執行されず、1943年4月の時点でミンスクには、前年7月末とほぼ同数の8500人のユダヤ人が維持されていた。しかしながら同年2月のスターリングラード攻防戦での敗北後、東部戦線のドイツ軍は全面的に後退局面に入る。それとともにソ連占領地でのホロコーストも最終段階を迎え、6月1日、ヒムラーは、東方占領地のゲットーの解体、労働可能なユダヤ人の西方の強制収容所への移送、労働不能者の殺害を命じた。

ヒムラーの命令後、ミンスクより西方に位置するリーガやヴィリニウスでのゲットー解体が1943年夏から始まったのに対し、ミンスクのゲットー解体は、ソ連占領地のなかでは最も遅く9月1日に開始される。同日、まず特別ゲットー1にいたドイツ・ユダヤ人がシロカヤ通りの労働作業所へ移され、9月14日の早朝、そのうち300人ないし350人の若い男性が、マーリィ・トロスティネツの農場で働かされていた480人とともにルブリン南方のマイダネクに向かって移送された<sup>13)</sup>。当時22歳であったローゼンベルクは、この時の移送者の1人であり、トレブリンカを経由して彼らが到着したのは、マイダネク強制収容所の支所、プジン労働収容所である<sup>14)</sup>。他方、ミンスクに残されたドイツ・ユダヤ人については、おそらく同じ9月14日にブラゴフシュチナで射殺されるか、ガス殺車で殺害された。次にシロカヤ通りの作業所に移されたのは、労働可能な者たちも含め、ロシア・ユダヤ人ゲットーにいたユダヤ人である。彼らは9月16日から9月18日まで、4回にわけてソビルの絶滅収容所に移送された。同時にこのとき、シロカヤ通りの作業所で働かされていたソ連兵捕虜もソビルの絶滅収容所に移送される。さらに10月はじめ、ミンスクからロシア・ユダヤ人とドイツ・ユダヤ人からなる一団がアウシュヴィッツに移送されたと推定されている<sup>15)</sup>。

こうしてほとんど空になったゲットーになお残るユダヤ人は、特別ゲットー1でユダヤ墓地に近接する一角にまとめられた後、10月21日から23日にかけてブラゴフシュチナに連行され、射殺された。これが、ミンスク・ゲッ

トーの最後である<sup>16)</sup>。ちなみに、ソビブルの絶滅収容所では10月14日に反乱が起こり、その後、収容所の解体が決定されたため、もはやミンスクのユダヤ人のソビブルへの移送は不可能であった。このソビブルでの反乱を率い、戦後に生き延びて反乱の証言者となったユダヤ人の1人が、上述の9月にミンスクからソビブルに移送されたソ連兵捕虜の1人、アレクサンドル・ペチェルスキに他ならない<sup>17)</sup>。ミンスク・ゲットーの最後のユダヤ人が殺害されてまもなく、10月27日より、ブラゴフシュチナの森では大量虐殺の痕跡を抹消するため、特別作業隊1005による死体の掘り起こしと焼却の作業が開始される。巨大な穴は34か所あったが、埋められた死体の腐敗で地面が陥没しているため、容易に見分けがつかない。作業に使用されたのはソ連兵捕虜である。作業は12月16日に、作業に携わった者たちの殺害をもって終了した<sup>18)</sup>。ソ連軍がミンスクを解放するのは、それから約7ヶ月後、1944年7月3日である。

ミンスク解放後、スモラルは街に戻る。ベラルーシのパルチザンが集合したミンスクは、パルチザンの巨大なキャンプ地のようなだった。西方ではなお戦闘が継続しており、パルチザンの動員態勢も解かれてはいなかったが、7月16日、モスクワ通りの競技場で戦勝祝賀会が開催され、戦勝パレードには、ベラルーシのパルチザンを代表する1100の派遣部隊が参加した<sup>19)</sup>。もしかするとこの時が、スモラルら、独ソ戦開戦のほとんど直後に立ち上がったミンスク・ゲットー内外の抵抗運動の生き残りたちのハイライトであったかもしれない。1989年に刊行されたスモラルの最後の回想記『ミンスク・ゲットー』の英語版で、彼らの戦後の運命を語る章のタイトルは、痛ましくも「共感と援助ではなく、憎しみと脅迫が」である<sup>20)</sup>。ミンスクの抵抗運動のメンバーを待ち受けていたのは、ナチ協力の嫌疑と逮捕であった<sup>21)</sup>。

戦後ソ連では、スモラルのような対ナチ抵抗運動のメンバーであれ、ドイツ軍の捕虜となった者や、民間人でドイツに連行された強制労働従事者であれ、共産党が「関知しない」ところでナチ・ドイツと接触した者たちに、ナチの協力者やスパイの嫌疑がかけられた。ドイツからソ連に帰還した強制労働従事者が、そのままソ連のラーゲリ送りになるという悲劇も多発した。ミンスクの抵抗運動メンバーの名誉回復が行なわれるのは、1953年のスターリンの死後、ようやく1960年代になってからである。スモラルは、ナチ協力の嫌

疑に対し、ミンスクの抵抗運動の弁明書『ミンスク・ゲットーから』をイディッシュ語で執筆し、1946年にモスクワで刊行した後<sup>29)</sup>、ポーランドに帰る。そのポーランドで1968年に反ユダヤ・キャンペーンに巻き込まれ、1971年にイスラエルに移住した。ミンスク抵抗運動の戦後史は、ソ連史の暗部として、稿を改めて検証されるべき問題である。

#### 第四章

- 1) Andrea Gotzes, *Krieg und Vernichtung 1941-1945. Sowjetische Zeitzeugen erinnern sich*, Darmstadt 2006, S. 73.
- 2) Cf. Leonid Rein, Local Collaboration in the Execution of the “Final Solution” in Nazi-Occupied Belorussia, in: *Holocaust and Genocide Studies*, Vol. 20, No. 3, Winter 2006. Olga Baranova, Nationalism, anti-Bolshevism or the will to survive? Collaboration in Belarus under the Nazi occupation of 1941-1944, in: *European Review of History*, Vol. 15, No. 2, April 2008.
- 3) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 92, 23. September 1941, S. 547. Rentrop, a.a.O., S. 139. この間、親衛隊帝国指導者ヒムラーは、8月14日から16日までミンスクを視察し、8月15日の午前中、出撃コマンド9ならびに警察大隊により、ミンスク郊外のスモレヴィチあるいはスミロヴィチで執行されたと推定される射殺に立ち会っている。ヒムラーの勤務日誌によれば、射殺されたのは「バルチザンとユダヤ人」であったが、その人数について、同じく射殺に立ち会った者たちの戦後証言は、100人から300人とするものまでばらつきがある。穴の淵での射殺を目の当たりにしたヒムラーの「動揺」は、ホロコースト研究者ラウル・ヒルバークの記述(ラウル・ヒルバーク『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』上巻、望田幸男、原田一美、井上茂子訳、柏書房、1997年、255ページ)によってよく知られるが、同時代史料の記述や関係者の証言はヒルバークの記述とはさまざまに食い違い、ヒムラーが本当に動揺したのかどうか、確定的なことは不明である。いずれにせよ視察後の展開からほぼ確認できるのは、ヒムラーは殺害方法の残酷さと、それによって生じる射殺執行者の精神的負担を問題視し、これが、排気ガスを用いたガス殺車の開発と実用化につながっていったことである。一酸化炭素ガスを用いた殺害は、すでに安楽死作戦(T4作戦)で実施されていたが、東部占領地に一酸化炭素ボンベを輸送することは困難であり、その代わりに考えられたのが排気ガスの利用であった。排気ガスによる殺害の実験は、9月中旬にモギリョフの精神障害者を対象として実施され、11月末には実用可能なガス殺車が完成した。
- 4) 詳しくは、野村真理「正義と不正義の境界——ナチ支配下ウィーンのユダヤ・ゲマインデ」(赤尾光春・向井直己編『ユダヤ人と自治——中東欧・ロシアにおけるディ

アスポラ共同体の興亡』岩波書店、2017年)の第3節および野村、前掲「1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人——ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって(後篇)」を参照。

- 5) VEJ, Bd. 8, Dok. 187.
- 6) VEJ, Bd. 8, Dok. 210.
- 7) Heinz Rosenberg, *Jahre des Schreckens*, übersetzt und bearbeitet von Hanna Zogt, Göttingen 1992.
- 8) Smolar, op. cit., p. 40.
- 9) ibid., p. 41.
- 10) Rosenberg, a.a.O., S. 20.
- 11) Ereignismeldung UdSSR, Nr. 140, 1. Dezember 1941, S. 845.
- 12) Gerlach, a.a.O., S. 625.
- 13) Ebd.
- 14) Rosenberg, a.a.O., S. 30.
- 15) VEJ, Bd. 8, Dok. 50, S. 179f.
- 16) Smolar, op. cit., p. 103.
- 17) Rentrop, a.a.O., S. 184.
- 18) VEJ, Bd. 8, Dok. 50, S. 177f.
- 19) Ebd., S. 178.
- 20) Gerlach, a.a.O., S. 625.
- 21) Rentrop, a.a.O., S. 143f.
- 22) マリナは、盗賊や犯罪者のあいだで用いられた隠語で、隠れ家を意味する。
- 23) Smolar, op. cit., p. 73. 子供たちの殺害に立ち会ったかどうかは別として、このときアイヒマンはミンスク滞在中であった。
- 24) VEJ, Bd. 8, Dok. 210, S. 494f.
- 25) VEJ, Bd. 8, Dok. 88, S. 250.
- 26) VEJ, Bd. 8, Dok. 210, S. 495. この「飴玉」について、ゲルラハは、残された文書史料から、クーベは、3月2日の殺害がゲッターの外ではなく、ゲッターの住人たちの眼前で執行されたことに嫌悪感を示し、泣き叫ぶ子供たちの生き残りの幾人かに飴玉を与えたことが読み取れるとする。そして、それ以上の状況は不明ながら、子供たちを埋める穴の淵から飴玉がまかれたというスモラルの記述は、おそらく誤りであるとする。(Gerlach, a.a.O., S. 692, Anm. 1024.)
- 27) Projektgruppe Belarus im Jugendclub Courage Köln e. V. (Hg.), a.a.O., S. 30.
- 28) Smolar, op. cit., p. 74. Rentrop, a.a.O., S. 144.
- 29) VEJ, Bd. 8, Dok. 88, S. 250.
- 30) Gerlach, a.a.O., S. 691.

第V章

- 1) ゲットーを脱出したユダヤ人が、パルチザン部隊に受け入れを拒否されるばかりか、部隊のメンバーによって殺害されるケースもあった。たとえばVEJ, Bd. 8, Dok. 271の1943年9月24日付けのソ連軍将校の証言を参照。また、パルチザン部隊に見られた反ユダヤ主義については、次の文献を参照。Leonid Smilovitsky, *Antisemitism in the Soviet Partisan Movement, 1941-1944: The Case of Belorussia*, in: *Holocaust and Genocide Studies*, Vol. 20, No. 2, Fall 2006.
- 2) Epstein, op. cit., p. 121f. Ainsztein, op. cit., p. 471.
- 3) VEJ, Bd. 8, Dok. 187, S. 427.
- 4) Epstein, op. cit., p. 134.
- 5) 第III章で登場したゲットーの抵抗運動のメンバー、ゲベレフの働きにより、その後5月に、イヴァン・コヴァリョフをリーダーとして市委員会が再建されたが、それも9月25日にメンバー全員が逮捕され、再び組織が壊滅した。以後もミンスク市内での抵抗運動は続いたが、市委員会に相当する組織は再建されなかった。
- 6) Ainsztein, op. cit., p. 476. Smolar, op. cit., p. 94. Epstein, op. cit., p. 143. ブジョンヌイは、ロシア革命後の内戦期の革命軍の英雄の名である。「ブジョンヌイ部隊」は、後に「ボノマレンコ大隊」へと成長した。
- 7) VEJ, Bd. 8, Dok. 290. フェイゲルマンらの証言中、1944年5月時点での部隊の構成について、総勢110人、そのうち戦闘員25人との数字があげられているが、証言の時系列的前後関係から、1944年ではなく、1943年5月の誤りではないかと推測される。
- 8) 彼らをモデルとする小説(ネハマ・テック『ディファイアンス——ヒトラーと闘った兄弟』小松伸子訳、ランダムハウス講談社、2009年)は、2008年にアメリカで、同じタイトルで映画化された。日本での公開は2009年である。
- 9) Smolar, op. cit., p. 112f. 市委員会の再崩壊については、本章の注5)を見よ。
- 10) フルンゼもまた、ロシア革命後の内戦期の革命軍の英雄の名である。
- 11) ゲットーからの、さらにミンスクからの脱出には、さまざまな方法が用いられた。たとえば、警察官になりすましたベラルーシ人の抵抗運動のメンバーを引率者とし、市外の作業現場に向かう労働大隊を装ったり、同じくベラルーシ人の協力者が運転するトラックや荷車の積み荷の下に身をひそめる等のやり方である。また、少なからぬ数の少年少女たちが、ゲットーと森のパルチザン部隊のあいだの連絡役として、あるいは森への追先案内人として活躍し、その途上で発見され、無残に殺害された。彼らはまだ10歳から15歳の子供とってよい年齢であったが、スモラルは、彼らはゲットーで子供であることをやめた者たちだったという。「森への案内人のほとんどは子供たちだった。彼らは、ゲットーで子供であることをやめた者たちだった。彼らは、どうすれば敵と出会うずにすむか、ゲットーの大人たち大勢よりもよく心得ていた。ゲットーのユダヤ人に何か待ち受けているか、よくわかっており、地下運動の基本的なルールも素早くマスターした。彼らはほとんど

ど笑わず、いく人かは、もう小さな老人、老女のようなだった。そして、まるで戦闘傷をもつ老練なパルチザンのごとく、銃の扱いを知っていた。」(Smolar, op. cit., p. 95.)

12) Cf. Smolar, *ibid.*, p. 121f. Ainsztein, *op. cit.*, p. 485.

## 第VI章

- 1) Epstein, *op. cit.*, p. 191.
- 2) Rentrop, a.a.O., S. 153.
- 3) VEJ, Bd. 8, Dok. 141, S. 343.
- 4) Smolar, *op. cit.*, p. 99.
- 5) VEJ, Bd. 8, Dok. 141, S. 343.
- 6) マーリィ・トロスティネツの村民のあいだでは、黒いガス殺車は「黒カラス」と呼ばれた。ガス殺車の開発については、第IV章の注3)を見よ。ブラゴフシュチナでの出来事の見撃証言については、VEJ, Bd. 8, Dok. 288, S. 696f.を見よ。ただし証言者は、1942年を誤って1941年としている。
- 7) *Unsere Ehre heisst Treue. Kriegstagebuch des Kommandostabes Reichsführer SS. Tätigkeitsberichte der 1. und 2. SS-Inf.-Brigade, der 1. SS-Kav.-Brigade und von Sonderkommandos der SS*, Wien 1965, S. 252.
- 8) VEJ, Bd. 8, Dok. 141, S. 343.
- 9) Rentrop, a.a.O., S. 148. Gerlach, a.a.O., S. 704f.
- 10) Rosenberg, a.a.O., S. 46f.
- 11) VEJ, Bd. 8, Dok. 141, S. 343. アクション後にゲッソーに残ったユダヤ人について、スマラルはドイツ側文書の8794人という数を否定する。(Smoral, *op. cit.*, p. 108.) ドイツ人はマリナに潜む者たちに気づいておらず、ゲッソーに残るユダヤ人の数は1万2000人程度であり、多くの女性や子供が含まれていたとする。回想記を読むと、マリナが隠れ場としてわれわれの想像以上に機能していたことがわかるが<sup>5</sup>、ゲッソーの、もともと1階建てか2階建ての貧相な建物内に作られたマリナに3000人以上の収容が可能であったのか、これも疑問を禁じ得ない。
- 12) ウィーンからマーリィ・トロスティネツに移送されたユダヤ人については、彼らの名を記念したWaltraud Barton (Hg.), *Maly Trostinec-Das Totenbuch. Den Toten ihre Namen geben. Die Deportationslisten Wien-Minsk/Maly Trostinec 1941/1942*, Wien 2015および2011年11月28/29日にウィーンで開催されたシンポジウム“Maly Trostinec erinnern”の報告集Waltraud Barton, IM-MER (Hg.), *Ermordet in Maly Trostinec. Die österreichischen Opfer der Shoa*, Wien 2012が刊行されている。また、ウィーンから移送されたユダヤ人のうち、数少ない生き残りの証言として、ウィーンのアーストリア抵抗運動文書館に史料DÖW 2563 (Zeugenaussage des Herrn Isak Grünberg), DÖW854 (Bericht über Judendeportationen aus Wien 1940-1943, Von F. Hexmann)がある。

- 13) Rentrop, a.a.O., S. 151, S. 215. マーリィ・トロスティネツの農場とは、1942年4月ごろ、ストラウフ指揮下のミンスクの保安警察ならびに情報部が、マーリィ・トロスティネツ村のかつてのカール・マルクス・コルホーズを接収し、そこに建設した自家用農場のことである。「司令官の農場」と呼ばれ、広さは約250ヘクタールであった。ユダヤ人の虐殺現場となったブラゴフシュチナの森は、農場からわずか1キロの距離に位置する。はじめ、農場経営に必要な建物等の建設で使われたのは、ミンスクの囚人やソ連兵捕虜である。農場がある程度かたちを整えた後、そこでは畑作のほか、牛、豚、馬、羊、家禽の飼育、金属や木工、ガラス細工等の職人仕事も行われ、労働で使用されたのは主にソ連兵捕虜であったが、農作業等にはマーリィ・トロスティネツの村民も動員された。(Vgl. VEJ, Bd. 8, Dok. 288.)
- 1942年5月からウィーンやテレージエンシュタットのユダヤ人が到着し始めると、移送者のうち、機械の修理工や電気技師など、農場経営に有益な技術者はブラゴフシュチナでの殺害を免れ、農場内のバラックに収容された。農場で働かされていた者の数は、1943年秋までに600人から900人のあいだであったとされる。1943年9月にその多くがマイダネクに移送された後、収容者の数は、ユダヤ人112人、ペラルーシ人80人に減少し、1944年夏のドイツ軍撤退時までこの状態が保たれた。
- ブラゴフシュチナの森では、1943年10月27日から12月16日まで、穴に埋められた死体の掘り起こしと焼却が行なわれ、以後、当地は殺害場所としての役目を終える。かわりに1944年のはじめに新たな殺害場所となったのが、司令官の農場をさき、ブラゴフシュチナの森とは反対側のシャシュコフカの森で、農場に近接する場所である。そこには、殺害と死体焼却を連続して行うことが可能な、地中に埋め込まれた四角い大釜のような装置が設置された。(図13)シャシュコフカで執行されたソ連兵捕虜やパルチザン、部分的には周辺村民の虐殺、また、ドイツ軍撤退時に農場内の穀物倉庫で執行された最後のソ連兵捕虜の射殺と、倉庫もろとも死体焼却の全貌は、ミンスク・ゲッターのホロコーストとは別に稿を改めて検証されなければならない問題である。以上について、詳しくは Rentrop, a.a.O., S.185f.を見よ。
- 14) Rosenberg, a.a.O., S. 69f.
- 15) Rentrop, a.a.O., S. 151. Gerlach, a.a.O., S. 740f.
- 16) このとき、ゲッター内のスハヤ通りがユダヤ墓地に突き当たるところにあった、もと墓地の番小屋の地下に設置されたマリナに26人が身を潜めた。そのうち13人はマリナのなかで死亡し、残り13人は1944年7月のミンスク解放まで約9か月を持ちこたえた。死者はマリナのなかで埋められたが、当然ながらマリナには腐敗臭が充満していた。2017年夏のミンスク訪問で筆者がガイドから聞いた説明によれば、マリナを発見したソ連兵は臭気のために気を失ったという。このマリナについては、第三章に登場したクラピナもインタビューで言及している。(Projektgruppe Belarus im Jugendclub Courage Köln e. V. (Hg.), a.a.O., S. 31f.)
- 17) ペチェルスキはウクライナ出身のユダヤ人である。独ソ戦に従軍して捕虜となった

後、ミンスク東方のポリソフの捕虜収容所から1942年8月、シロカヤ通りの労働作業所に移された。

- 18) マーリィ・トロスティネツでの遺体の掘り起こしについて、1944年7月17日付けの同時代人による証言については、VEJ, Bd. 8, Dok. 288, S. 698を見よ。
- 19) Smolar, op. cit., p. 149f.
- 20) ibid., p. 157.
- 21) 詳しくは、Epstein, op. cit., p. 228f.を見よ。
- 22) 第Ⅲ章の注20)を見よ。

[付記] 本稿は、科学研究費・基盤(C)・課題番号17K03167および基盤研究(B)・課題番号16H03494による研究成果の一部である。



図13 シャシュコフカの森のホロコースト記念碑  
(2017年8月27日、筆者撮影)